

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 11 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370552

研究課題名(和文)院政期の和漢混淆文の研究 - 『愚管抄』を中心に -

研究課題名(英文)A study of Insei-Period Sino-Japanese Hybrids: Jien's Gukansho

研究代表者

アルベリッツィ V. L. (Alberizzi, Valerio Luigi)

早稲田大学・グローバルエデュケーションセンター・准教授(任期付)

研究者番号：60630910

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：愚管抄を中心に和漢混淆文について調査を行った結果、『愚管抄』において語彙の面では、「和」「漢」両要素の一定の「併用」が認められるものの、それが真の意味での「混淆」なのかを認定するのは困難である。その主な原因はそれぞれの系統の特徴の共存にあるのみならず、特にその偶発性と必然性のあいだの度合いにあると思われる。日本の言語生活史における慈円と『愚管抄』の位置を見定め、その言語の分析に新たな一光を投じるために、中世における講釈・聞書・唱導などの実態に関する和漢の混淆という現象をさらに追究する必要があるということが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This survey of Sino-Japanese hybrids in Jien's Gukansho demonstrated the following:

1) The vocabulary indicates the simultaneous adoption of Japanese vernacular and Sinitic expressions in the same context. 2) Since merging a Sinitized context with a Japanese vernacular one was an elaborate process that involved various degrees of complexity, it is difficult to tell whether such lexical choices were intentional or not. The outcome was often the result of happenstance rather than the product of established rules. 3) Additional research on the language of lectures and Buddhist law sermons in the Middle Ages is needed to offer a complete picture of the Sino-Japanese hybrid writing and properly to place the Gukansho within the history of middle Japanese.

研究分野：言語学・日本語学

キーワード：和漢混淆文 漢文訓読 日本語史 愚管抄 デジタル教材

## 1. 研究開始当初の背景

(1)古典日本語の文体に和漢混淆文と呼ばれるものがあり、日本人が自言語を書き記す際に使用する「和文調」と漢文を日本語として読み下す際に使用する「漢文訓読調」とさらに当時の口語的な要素を含む「俗語」を交えた独特な文章様式として理解されてきた。

(2)近代日本語文体の源流として極めて重要な役割を果たしているにもかかわらず、社会一般や研究者の関心は今なお低く、具体的に和文調・漢文訓読調・俗語とはどのようなものなのか、またその要素の混淆とはどのような状態なのかということは従来の研究によって十分に解明されてはおらず、客観的および実証的な再検討が必要である。

(3)上記の背景を受けて、研究代表者は和漢混淆文現象の文体分析のための適切な資料を追求し、鎌倉時代に書かれた『六代勝事記』、『五代帝王物語』、『愚管抄』という歴史書に焦点を当て、特に漢語・仏語・俗語を交ぜ用いた独特な文体をもつとされている『愚管抄』について、その全体像を把握する試みを実行しようとしたものである。

## 2. 研究の目的

(1)本研究は日本語学の立場から、古典日本語の文体のうち、和漢混淆文について、それが日本の言語生活においてどのような影響を及ぼしたのか、その言語学的な特徴を解明することを目的とする。

(2)その際、日本語学的な調査はまだほとんど実施されていない『愚管抄』に焦点を絞り、和漢混淆の現象の具体的な様相を把握し、「和」と「漢」の要素がどのように混淆して行ったかを検討することにより、院政・鎌倉時代の日本語史の一面に一光を投じることとする。『愚管抄』の文章は著者とされている慈円が歴史というものの複雑で多様な意味について考察し、その省察を記述しようとしたものであるため晦渋で、難解であることは多くの専門家に指摘されている。このような入り組んだ文章は慈円の口述筆記という方法で書かれたものではないかと推論されている。この推測が正しければ『愚管抄』の異色の文体は聞き書きによるものであるという可能性が浮上し、様々な問題を提起する。和化した漢文によって思索していた中世初頭の貴族が、仮名交じり文で口述し、それをそのまま筆記させたときにどのような問題が起こるかを見ることができるところである。

(3)そして、このような方針に沿って、『愚管抄』に限定せず、中古・中世における日本人有識者の漢籍や仏典などの解読と受容に迫る可能性を探り、漢字文化圏における自言語による古典文献の解読と受容の諸相を見出そうとするものである。

(4)最後に、本研究に対する研究者および一般社会の意識と理解は必ずしも高いとは言えないため、タブレット型端末などの特徴を活かして、文字情報だけに頼らずに、読み手により豊富な情報を与えるコンテンツの作成方法を追究する。

## 3. 研究の方法

(1)上記の「研究開始当初の背景」および「研究の目的」に基づき、和漢混淆の全体像を浮き彫りにするために、「和」「漢」の要素を厳密に測定する必要がある。このような取り組みを確実に実施するために、下記の作業を順次展開する。

(2)従来余り検討されて来なかったものも含め、公私の図書館等に所蔵されている和漢混淆文資料を調査、閲覧するほか『愚管抄』の諸伝本の調査を行う。

①その際、和漢混淆文に関する資料のデジタルアーカイブの構築とともに、タブレット型端末などによる写本の細密な翻刻の作成法についても検討する。

(3)次に、写本とその本文の分析に当たって表記・語彙・表現といった日本語文体のフレームとなるすべての特徴を分析構造に取り入れている、アルベリッツィ(2010)が試案した理論的なモデルを適用し、両文脈の混淆状態を詳細に調査することにより、全文の性格を明らかにする。

①特に、先行研究の諸説を承けてすでに特定できた「和」「漢」異系統同義語 141 語を中心に『愚管抄』における分布を調査する。さらに、定量分析の範囲を拡張し、和漢語彙が『愚管抄』に現れる度合いという密度分析を行った後、異系統語彙の採用状況を調べるための文脈上での分析を行う。

(4)(3)の調査によって浮上した『愚管抄』における和漢混淆の特徴と中古・中世の日本における仏典や漢籍などの解読と受容との関連を追究し、日本語としての漢文の解読・受容に関する言語学的過程、及びその文化的な背景の位置づけを追究する。

(5)上記から得た知見を総合することによって、日本の言語生活史における慈円と『愚管抄』の位置を見定めるとともに、今後の和漢混淆文研究の焦点をどこに絞るべきかを検討する。

## 4. 研究成果

(1)3. で述べた研究方法に基づき、和漢混淆の現象および『愚管抄』について調査研究を行い、(2)～(6)に挙げられている知見を得ることができた。

(2)日本語学的な観点から『愚管抄』の調査研究を行う場合、現在所在が知られている諸伝本の中では、最古の書写（1476年）である宮内庁書陵部蔵の文明本が最も有力な資料である。それが最古の書写であるだけでなく、文中に異本との校合も注記され、有力な手がかりになるからである。

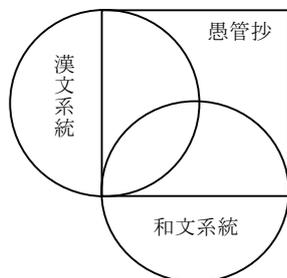


図1 愚管抄における和漢の混淆

(3)和漢混淆の現象には恣意的な選択による系統および意図的な選択によるものの二系統が認められる。しかし、いくつかの例外を除けば、前者の特定は非常に困難である。それぞれの文献の性格に強く依存していることがその一つの原因であると考えられる。

①『愚管抄』において語彙の面では、和の要素と漢の要素の混淆の程度の定量的分析を行った結果、同じ意味領域を共有しながら、相違する文脈に採用されている複数の語彙が共存することを特定できた。しかし、対語が明確に区別され、採用されている件数は少なかったため、必然性による使用というよりも、偶発性による使用のように考えられる。したがって、最下位の「混合」と認定せざるを得ないが、調査に用いられた異系統同義語141語に含まれていないほかの語彙も散見できたので、和漢対照語の再検討の余地が残されていると思われる。

(4)(3)の調査でも改めて明らかになったように、和漢混淆文の検討の困難さの原因は、それぞれの系統の特徴の共存にあるのみならず、特にその偶発性と必然性のあいだの度合いにあると思われる。さらに、今まで特定できた漢文系統の表現は主に統語的關係を示す文脈を構成する要素であることも看過できない事実である。

①『愚管抄』において浮かび上がった和漢混淆文像は漢文の訓読から借用した機能語が文脈のフレームを形成し、できあがったその枠内に和文の独特な表現を埋め込むという文体である。和文脈および漢文脈のような精度の高い文章形式が独自の同じ機能構文をもってテキストに現れたが、それは真の意味での「混淆」というよりも「併用」の段階に留まり、和漢混淆文の一環としての採用とみなすべきであると考えられる。

(5)(3)と(4)の調査が示したように、和漢混淆文の研究は更なる飛躍を成し遂げるために、多角的に「漢」の要素を追究する必要がある。特に、経文を唱えて教えを説くために書かれた唱導・表白を含む中世における講釈・聞書などに関する和漢の混淆の実態を解明することで、この言語的な現象の分析に新たなる一光を投じることが可能になるばかりではなく、日本の言語生活史における慈円と『愚管抄』の位置を見定めるためにも、大きな手がかりが得られると思われる。

(6)最後にタブレット型端末などで閲覧できる写本の細密な翻刻の作成法について検討した結果、文字情報だけに頼っている本来のテキストに比べて、読み手の疑似体験的な理解へ導くインタフェースを作成する展望が開けた。その実用的な効果については今後の課題にしたいと思う。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

① Alberizzi Valerio L., 'Sezoku genbun, Kuchizusami and Wakan roeishu as primers for high ranking aristocrats scions', Ross King 編, *Accessing the Cosmopolitan Code in the Sinographic Cosmopolis: Learning Literary Sinitic in Traditional East Asia*, Leiden: E. J. Brill, 査読有, 2018 発行予定 (掲載決定)

② Alberizzi Valerio L., 'The influence of vernacular vocabulary on the Japanese Language', Bjarke Frellesvig, Satoshi Kinsui, John Whitman 編, *Handbook of Historical Japanese Linguistics*, Berlin: De Gruyter Mouton, 査読有, 2017 (掲載決定), 1-18.

③ Alberizzi Valerio L., "The role of kunten materials in the process of Sino-Japanese Hybridization", *Quaderni di Linguistica e Studi Orientali - QULSO / Working papers in Linguistics and Oriental Studies*, vol. 1, 査読有, 2015, 233-258.

④ Alberizzi Valerio L., 'An introduction to kunten glossed texts and their study in Japan', Franck Cinato - John Whitman 編, *Reading classical texts in the vernacular*, Les dossiers d' H.E.L. (Histoire Épistémologie Langage) 7, 査読有, 2014, 33-42.

[学会発表] (計3件)

① Alberizzi Valerio L., *Decoding the text - Vernacular Japanese reading of Classical*

Chinese texts, Laboratoire d' Histoire des  
Theories Linguistiques Scientific Meeting,  
2015年3月21日, 招待講演, パリ第7大学  
(パリ, フランス)

② Alberizzi Valerio L., The Pelliot  
collection and Japanese glossed materials,  
Glossateurs, passeurs de savoir, 2015年  
3月20日, フランス国立図書館 (パリ, フラ  
ンス)

③ Alberizzi Valerio L., 新たなる古典日  
本語の発見, 日本語学会, 2014年10月18日,  
北海道大学 (札幌市)

[その他]

ホームページ等

① デジタルテキストブックとインタラクテ  
イビティ

<https://goo.gl/rPElp0>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

アルベリッツィ V.L. (Alberizzi, V.L)  
早稲田大学・グローバルエデュケーション  
センター・准教授  
研究者番号：60630910

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：

### (4) 研究協力者

( )